

子どもの貧困の一考察

- シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査 -

Child Poverty Research

- Investigating the Awareness of Junior College Students
in regard to the State of Poverty of Single Mother Households -

陳 惠貞

Hueichen Chen

摘 要

日本における子どもの貧困問題がコロナ禍の影響でさらに深刻化になった。特にシングルマザー世帯の貧困が一層厳しくなった。昨年度より、シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査を行い、学生の貧困問題への関心と理解を調査した。本研究の目的は学生たちがどのように「子どもの貧困」を認識しているのか、また周りにどのような貧困の実態が潜んでいるのかを質問紙調査を通して明らかにすることと再検証することである。研究結果として、学生全般はそれほどシングルマザー世帯の貧困への関心が高くないという結果になった。そして、貧困の事例を取り入れた講義を丁寧に解説することによって、理解や関心を高める効果があったことが分かった。再検証として昨年（2019）年度の結果と比べると、今回の項目ごとグループ間の差が大きかったことより、事例の学習効果が絶大だと考えられる。つまり、学生が資料ありとなしの違いによって、貧困に対する認識がはっきりしていると客観的に評価することができた。筆者は保育者・教員養成校で、教育心理学・発達心理学・保育の心理学・幼児理解の理論と方法・子ども家庭支援の心理学・心身の発達と学習過程など教職関連の授業を担当している。調査結果を各授業にフィードバックし、学生たちに子どもの貧困について意識や関心を高めることを目標としている。さらに保育・教育の仕事はいかに子どもの発達を支え、子どもを貧困から守るかを理解させることによって、専門職として保育者・教育者を目指す学生の意識を向上し、モチベーションや学習意欲を高めることをねらいとしている。

キーワード 子ども 子どもの貧困 シングルマザー世帯の貧困 モチベーション
保育専門職 教職

． 研究目的

日本における子どもの貧困問題がコロナ禍の影響でさらに深刻化になった。特にシングルマザー世帯の貧困が一層厳しくなった。2020年10月28日付1面新聞記事に「19歳ひとり親『ご飯ない』と検索ⁱ」という見出しが衝撃的である。この若いシングルマザー自身は親から虐待を受け、児童養護施設で育った。コロナ禍の最中で出産し、復職できず困窮に陥った。先進国でさえコロナで広がる貧困に拍車をかけていると危惧される。

昨年度より、シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査を行い、学生の貧困問題への関心と理解を調査した。「待機児童ゼロ」というスローガンを掲げた前政権によって、2019年10月に「保育料無償化」が始まった。しかし現状は、コロナ禍の影響を受け、前にも増して保育士不足を解消しないまま、子どもたちの行く場が狭まれる一方である。コロナ禍の中で、現場の保育者は対人的な職業柄から「在宅勤務」や「遠隔保育」というのは無理がある。命の危険をさらし、保育士は待遇を改善されないまま、そのうえ長時間保育が強いられる厳しい状況にある。保育士不足と叫ばれ、保育士の離職率が高まる一方で、ベテラン保育士の育成は一層難しくなる。昨年度より保育士の一斉退職により、閉園に追い込まれた認可保育所ⁱⁱがあったというショッキングな出来事が続いている。今年度にも、「都市部で長年待機児童を受け入れてきた保育園などで相次ぐ、定員割れや閉園」ⁱⁱⁱが報道された。経済的不安定な状況のもと家庭環境が悪化し、現職の保育士からも、子どもたちの居場所づくりに苦慮している現状が報告された。規制緩和による企業の参入がどんどん増え、保育・教育環境の悪化を目にし、「保育異変」という特集で「認可園で虐待 おびえる我が子」と題して、「トイレでたたく・おやつ無理やり口に…」、「待機児童問題・人手不足…質にばらつき、参入増えたがチェックは不十分」^{iv}という衝撃的な内容があった。また、助成をめくり詐欺などの事件が報道された^v。さらに、「保育料無償化」と言われながら、実際には園が値上げし、保護者が払う金額が増したという逆転現象により不条理さが生じた。今まで懸命に稼ぎ、保育料を払ってきた人たちに世代間の不公平感、世帯間の格差が広がる懸念^{vi}など、様々な問題で新たな社会問題に発展している。このような不安定な社会の中で、一番影響を受けているのは社会の弱者であり、特に子育て中のシングルマザー世帯である。

ここで用語の使い分けを先に断っておきたいのは、本研究にある保育者と保育士の用語である。保育士は引用先に従い、忠実にそのまま引用した。保育者は、保育所の保育士と幼稚園教諭の総称とする。

日本における子どもの貧困問題がとり沙汰されてから久しい。中田ら(1997)の『日米のシングルマザーたち』^{vii}が出版され、以来シングルマザー世帯の貧困が注目されてきた。あれから24年間を経た現在もなお「子どもの貧困」がさらに進んでいる。筆者は2017年より3年間、「東アジア保育者養成研究会」で「現代の子どもの貧困」の課題に取り組み、

共同研究をしてきた^{viii}。

2017年度に、筆者は機関誌『子ども学研究論集』で、「シングルマザーの貧困と子どもの発達に関する一考察 保育者をめざす学生の学習意欲を高めるために」^{ix} というテーマで、初めてシングルマザー世帯における生活の困窮と子どもの発達とのかかわりについて調査を実施し、分析結果を発表した。2018年度、「シングルマザー世帯の貧困に関する調査研究 保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために」^x というテーマで発表、支援する手立てを探ることを目的とし、シングルマザー世帯の新たな事例を取り上げて分析した。2019年度に、短大生に対して調査を開始し、「シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査 保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために」^{xi} を発表した。筆者は保育者・教員養成に携わり、教職関連の授業を多く受け持っている。研究調査の結果を各授業にフィードバックし、学生に保育の仕事がいかにかかわり子どもの発達を支え、子どもを貧困から守るかを理解させ、専門職として保育者・教育者を目指す学生の意識を向上し、モチベーションや学習意欲を高めることをねらいとしている。常に研究成果を教育現場へフィードバックすることを意識し、保育者・教員養成に役立てようとすることは大学教員の務めであると認識している。

その目的意識を持ちながら、2018年5月に日本保育学会第71回大会において、「シングルマザーにおける生活と子育て - 現代の子ども貧困」^{xii} というテーマでポスター発表を行った。「子どもの貧困」が注目される中、日本における最新の情報を把握しつつ、シングルマザー世帯の子育ての厳しい現状を調査し、支援策を探っていた。その研究成果を学生へフィードバックしていく際に、幼児保育・教育現場の事例を取り上げた。名古屋市中心部にある身近な保育所に保育者のチームプレーによって救われたシングルマザー世帯の事例を解説した。しかし、悲惨な事例にもかかわらず、実感が湧かない学生が多くいたことに筆者は衝撃を受けた。周知の通り、貧困の捉え方について、「絶対的貧困」と「相対的貧困」と定義されている。しかし、阿部彩が「貧困の定義の具体化の際に、さまざまな学術領域、また、各々の研究者によっても異なる変数が用いられ、このことが貧困研究を学際的に理解することを難しくしている。厄介なのは、貧困による影響は連続的ではないことである」^{xiii} と指摘した。貧困を具体化するには変数が多岐である。更に人によっては主観的と客観的な判断によって大別になると考えられる。従って、いまの学生たちが考える貧困はどのようなものかを調べる必要があると考え、実態調査をすることにした。とりわけ保育者・教育者を目指す学生には、身近に起きている貧困について気がつかずいたら、これから保育・教育に携わる際、貧困に脅かされている子どもを救えないのではないかと危惧した。そこで、昨年度の課題を引き続き調査し、事例研究の効果を再検証することにした。学生たちはどのように「子どもの貧困」を認識しているのか、また周りにどのような貧困の実態が潜んでいるのかを質問紙調査を通して明らかにしていくことを本研究の目的とする。

． 研究方法

1． 調査の概要

調査対象：愛知県内の養成校の学生 67 名に質問紙調査を行った。内訳として、Aグループ：「生活困難な家庭への保育と支援」¹ の事例の授業を受けた学生 36 名。Bグループは、貧困の事例の授業を受けていない学生 31 名であった。

2． 調査時期

実施日は 2021 年 1 月 29 日であった。

3． 調査方法

コロナの影響により対面的ではなく、Teams によるオンラインで調査を実施した。まず、Aグループの学生に対して、「生活困難な家庭への保育と支援」の事例を解説し、後に質問紙調査を行った。事例の説明と調査時間を合わせて約 1 時間。一方、Bグループの学生に対しては、事例の提示がなく直ちに調査を行った。すべての調査対象者に対して、質問紙調査を行う直前に日本の子どもの貧困問題とシングルマザーの貧困について簡単に説明し、調査の趣旨に触れ、調査協力を要請した。質問紙調査の時間は約 15 分間。すべての調査対象に無記名方式で、統計処理を行う説明をし、倫理的な配慮を確認した。また、調査結果を学会や論文発表することの了承を得た。

質問紙について概ねの内容：(全部で 6 問だが、第 1 問には 21 項目の質問がある。第 2～6 問は自由記述である。)

1. あなたの考える「シングルマザーの貧困」はどのようなものですか？ (21 項目)
2. あなたはシングルマザーの貧困について関心がありますか？
3. あなたはシングルマザーの貧困について見聞きしたことがありますか？
4. あなたの周りに子育て中のシングルマザーがいますか？
5. あなたの周りに事例のような要支援な子どもがいますか？
6. もしあなたが保育士だったら、事例のような貧困のために支援を必要とする子どもにどのような援助をしたいですか？

． 結果と考察

Excel の統計機能を用いて、度数分布や割合を算出し比較した結果である。

1 小堀恵子・和田亮介 (2017) 「生活困難な家庭への保育と支援」『季刊 保育問題研究』284 号、pp.314-317

調査対象の内訳と結果として、67名の学生のうち、Aグループ：「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた学生36名、有効回答数25名、有効回答率69%で、うち男性5名と女性20名であった。Bグループは、貧困の事例の授業を受けていない学生31名で、有効回答数21名、有効回答率68%で、うち男性4名と女性17名であった。

まず、質問紙の第1問に「あなたの考える『シングルマザーの貧困』はどのようなものですか？」の21項目について、分析した結果を「生活の質」・「世帯の家計の状況」・「保護者の状況」という3つのカテゴリに分けた。

「生活の質」：

- (1) 携帯電話・スマホをもっていない。
- (2) ダイエットをしていないのに食事抜き。
- (3) いつも汚れた洋服を着つづけている。
- (4) お風呂（シャワー）に入らず、清潔を保っていない。

「世帯の家計の状況」：

- (5) 電気・ガス・水道代が払えないことがある。
- (6) 医者にかかりたくても、支払いが心配で我慢することがある。
- (7) 子どもの学用品費や給食費が払えないことがある。
- (8) 食料品（野菜・肉・魚・果物など）が買えないことがある。
- (9) 必要な学習参考書などが買えない。
- (10) 自動車を買えない。
- (11) テレビ・冷蔵庫・クーラーを買えない。
- (17) 持ち家に住めない。
- (18) 家賃の支払いが滞納している。
- (19) 生活保護を受けている。
- (20) 返済できないローン（借金）をかかえている。
- (21) 1年に1回くらい遊園地や動物園へいく余裕がない。

「保護者の状況」：

- (12) 十分な教育を受けていない（中卒・高卒、大検も含む）。
- (13) 安定した正規の仕事を見つけることができない。
- (14) よく子どもを怒鳴る。
- (15) 生活費を稼ぐため子どもの世話が十分できない。
- (16) 生活に金銭的・精神的な余裕がない。

表1に示しているように、Aグループである「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた学生と事例の授業を受けてないBグループ学生について、各項目において大きな差がみられた。A（資料あり）とBグループ（資料なし）との間は、(12)、(14)、(16)、(19)の4つ項目を除いて、他の17項目のすべてBグループ（資料なし）が有意に貧困に対

する意識が乏しい。特に、「(12)十分な教育を受けていない」と「(14)よく子どもを怒鳴る」の2つの項目は逆転しているので、貧困の要素ではないと認識しているようである。一方、「(16)生活に金銭的・精神的な余裕がない」と「(19)生活保護を受けている」の2つの項目は、AとBグループの間に差が全くみられず、同じ76%で一致している。つまり、この2つの項目は今回の調査対象であるすべての学生が貧困の要素と認識している。

貧困の要素と意識しているほかの17項目のうち、(3)、(4)、(8)、(11)、(18)の5項目にAとBグループとの間に50%以上の差異があり、Bグループのほうが低いことが分かった。どのような項目内容でAとBグループ間の学生が貧困に対する意識の開きがあったかを確認すると以下の通りである。(3) いつも汚れた洋服を着つづけている。(4) お風呂(シャワー)に入らず、清潔を保っていない。(8) 食料品(野菜・肉・魚・果物など)が買えないことがある。(11) テレビ・冷蔵庫・クーラーが買えない。(18) 家賃の支払いが滞納している。

表1 第1問：シングルマザーの貧困の21項目の結果

n=46

カテゴリ	生活の質				世帯の家計状況										保護者の状況						貧困〇の数平均	
	項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	17	18	19	20	21	12	13	14		15
項目内容	携帯・スマホ所持	食事の欠食あり	汚れた服	入浴・清潔不十分	電気・ガス・水道代延滞	受診抑制	学用品費・給食費延滞	食料品購入抑制	学習参考書購入抑制	自動車購入抑制	テレビ・冷蔵庫等購入抑制	借家	家賃延滞	生活保護家庭	返済不能のローン有り	年一回の行楽無し	低学歴	非正規	よく子どもを怒鳴る	子どものケアへの時間不足	経済的・精神的余裕無し	
資料あり群 25/36名	12 48%	20 80%	22 88%	18 72%	23 92%	21 84%	23 92%	20 80%	22 88%	14 56%	18 72%	11 44%	23 92%	19 76%	19 76%	9 36%	13 52%	15 60%	3 12%	22 88%	19 76%	17.43
資料なし群 21/31名	4 19%	8 38%	6 29%	3 14%	15 71%	11 52%	13 62%	6 29%	16 76%	8 38%	4 19%	5 24%	7 33%	16 76%	13 62%	5 24%	13 62%	7 33%	5 24%	12 57%	16 76%	9.19

21項目のうち、それぞれの群による貧困のチェック数の平均値は、Aグループが17.4項目、Bグループが9.2項目であった。実に54%以上の開きがあった。以上の結果より、事例研究の資料を用いて学習することによって、貧困に対するイメージがより具現化し、理解し易くなったことが明白だと言えよう。つまり、貧困に対する意識を高めるには実例を挙げることは効果的であることが明らかになった。多いに授業に取り入れることによって、意識を高めることが期待できる。また、資料提示の有無によって、50%以上大きく意識の差異がみられた5項目を重点的に説明することが効果的と推察する。

質問紙の第2問「あなたはシングルマザーの貧困について関心がありますか？」について、有効回答者46名のうち関心があるのは29名(63%)；関心がないのは2名；どちらでもないのは15名であった(表2参照)。シングルマザーの貧困について関心がある学生は63%を占める一方、関心が示されなかった学生は37%を占める。関心があるのはシング

ルマザーの「仕事と育児の両立」と「精神面・心情」が多く、他に「生活のやりくり」、「子どもの様子」、「十分に食事を与えているか」、「どのように子どもと関わっているか」などの回答であった。日本社会を騒がしている貧困問題に対して、養成校の学生として関心度はやや低いように思われる。その他、特に求めてはいなかったが46名のうち3名(6.5%)がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上の可能性があるかと推測できる。身近な問題だけに、多くの学生が関心を持って取り組んで欲しい課題である。さらに教員として、もっと多くの学生が関心を示すように取り組まなければいけない課題でもあると考える。関心のある学生について、AとBグループとの間の差異をみると、Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数は(15:14)であり、差が認められなかった。

表2 第2～4問の統計結果

n=46

質問内容	ある	ない	どちらもない	無回答
2問：あなたはシングルマザーの貧困について関心がありますか？	29;63% (15:14)	2;4% (1:1)	15;33% (9:6)	0 (0:0)
3問：あなたはシングルマザーの貧困について見聞きしたことがありますか？	24;52% (14:10)	18;39% (7:11)	2;4% (2:0)	2;4% (2:0)
4問：あなたの周りに子育て中のシングルマザーがいますか？	18;39% (12:6)	16;35% (9:7)	9;20% (2:7)	3;6% (2:1)

()の中は(Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数)

質問紙の第3問「あなたはシングルマザーの貧困について見聞きしたことがありますか？」について、46名のうち見聞きがあるのは24名；見聞きがないのは18名；どちらでもない2名；無回答2名であった(表2参照)。シングルマザーを見聞きした状況、大半はテレビのニュースや授業であることが分かった。これだけ世間を騒がせている貧困問題を見聞きしたことのない学生の多さに驚いた。さらに、見聞きしたことある学生は、Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数は(14:10)である。一方、見聞きしたことない学生は、Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数は(7:11)であり、逆転していることがわかった。つまり、Bグループの学生は普段の生活からテレビのニュースや授業でシングルマザーの貧困について触れるチャンスが少ないことになる。今後一層多く授業の中で貧困問題を取り入れ、すべての学生にこの問題を触れさせ、考えさせる機会を作らなければと感じた。

質問紙の第4問「あなたの周りに子育て中のシングルマザーがいますか？」について、46名のうちいるのは18名；いないのは16名；わからない9名；無回答3名であった(表2参照)。40%弱の学生が周りに子育て中のシングルマザーがいると気づいていたが、他の60%強の学生が気づかない若しくは関心がなかったと言えよう。AとBグループとの

間の差異をみてみると、Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数は(12:6)である。一方、見聞きしたことない学生は、Aグループ資料ありの人数：Bグループ資料なしの人数は(9:7)である。いずれBグループの学生が周りに子育て中のシングルマザー世帯に気づけなかったことになる。

質問紙の第5問「あなたの周りに事例のような要支援の子どもがいますか？」について、Aグループのみの回答になるが、25名のうち「いる」と回答したのは2名；「いない」は13名；「わからない」は3名；「無回答」は7名であった。学生は周りに要支援な子どもがいるかどうかを判断するのが難しいと考える。また、周りに事例のような要支援な子どもの存在を信じがたい気持ちの表れではないかと思われる。

質問紙の第6問「もしあなたが保育士だったら、事例のような貧困のために支援を必要とする子どもにどのような援助をしたいですか？」については、「保育の中での子どもに」と「母親に」とさらに2つの下位項目に分けた。要支援の子どもに対して行いたい支援について、自由記述で回答してもらった。自由記述にもかかわらず、ほとんどの学生が回答をしてくれた。要支援の子どもとその母親に寄り添う姿勢が表れていた。数例学生からの回答を以下に挙げる。

- (1) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「母親に余裕がなく十分な愛着関係を築けていないので園内で安心感を持てるように働きかける」
「母親に」に対する援助：「受けることのできる支援についての理解がない事があれば案内をする」
- (2) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「落ち着ける雰囲気をつくる」
「母親に」に対する援助：「話を聞く、否定的な言葉は使わず、寄り添いたい」
- (3) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「食事面などを少し多めなど」
「母親に」に対する援助：「経済的支援を得るところ、精神的支援を得ることのできる場所へ案内をする」
- (4) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「安心感を与える、日頃から子どもや保護者との連携を取り気づいていきたい」
「母親に」に対する援助：「保育者は母親の味方であることをしっかりと伝えていき、相談に乗ったり、少しでも支えになれるよう援助する」
- (5) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「怪我や病気などがないか敏感になったり園で安心して楽しく生活できるように努める」
「母親に」に対する援助：「送り迎えや教材の足りないものなどの支援をしたり話などをよく聞いて寄り添っていきたい」
- (6) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「母親がとれていないコミュニケーションを補

えるように積極的に関わる。しかし、嫌な気持ちになったり怖い思いをしているようなら工夫する」

「母親に」に対する援助：「積極的に話しかけ日常生活での様子を伺い、悩みについて協力し援助する」

- (7) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「子どもが孤立せず安心して過ごせる場所の提供、必要な栄養を摂取できる食事の提供、子どもの気持ちの管理、ストレスがないように優しく支援する」

「母親に」に対する援助：「一人親世代に対する、生活から様々な支援、相談相手にもなる、社会的に孤立しないように子どもの養育力を育てるために一緒に子育てに寄り添う、気持ちの面でも」

- (8) 「保育の中での子どもに」に対する援助：「家で悲しい事がないか話を聞く・お母さんの様子を聞く・園では沢山遊んであげる」

「母親に」に対する援助：「支援できる機関を探して教える・ご飯を食べさせるのがしんどそうだったら、子ども食堂が周りにはないか調べて教える」

以上のように多数の回答から僅か8例を挙げたが、学年が高くなるにつれて記述が具体的になり、親子に寄り添う姿勢が表れていた。

考察1：表1に示しているように、Aグループ（資料あり）「生活困難な家庭への保育と支援」の事例の授業を受けた学生と事例の授業を受けてないBグループ（資料なし）学生について、各項目において大きな差がみられた。AとBグループとの間は、(12、14、16、19)の4つ項目を除いて、他の17項目のすべてBグループ（資料なし）が有意に貧困に対する意識が乏しい。ちなみに、「(12)十分な教育を受けていない」と「(14)よく子どもを怒鳴る」の2つの項目は逆転しているので、貧困の要素ではないと認識しているようである。

貧困の要素と意識している17項目のうち、(3、4、8、11、18)の5項目にAとBグループとの間に50%以上の大差があり、Bグループのほうは貧困の要素であることが認められなかった。一方、「(16)生活に金銭的・精神的な余裕がない」と「(19)生活保護を受けている」の2つの項目は、AとBグループとの間に差が全くみられず、同じ76%で一致していることから、今回の調査対象すべての学生が貧困の要素だと認識していることが分かった。

考察2：第2問のシングルマザーの貧困について関心がある学生は63%を占める一方、関心が示さなかった学生は37%を占める。関心を示さなかった養成校学生の多さに問題があるように感じた。第3問のシングルマザーを見聞きした状況について、大半はテレビのニュースと授業であることが分かった。これだけ世間を騒がせている貧困問題に見聞きしたことの少ない学生の多さに驚いた。見聞きしたことがないというより、無関心ではと推察する。第6問の要支援の子どもに対して行いたい支援については、学年が高くなるにつれ

て記述が具体的になり、シングルマザー世帯の親子に寄り添う姿勢が表れていた。

考察3：質問紙の回答の中で特に求めてはいなかったが、46名のうち3名(6.5%)がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上の可能性があるかと推測する。

考察4：これらの結果により、まず貧困に対する意識を高めるには実例を挙げることが効果的であることが明らかになった。学習効果があるので、積極的に授業に取り入れることにより、貧困への意識が高まる。また、学生が貧困と認識している項目内容を強化することによって、より実感が湧くのではと期待する。

考察5：再検証として昨年(2019)年度の結果(表3)と(表1)を見比べると、今回の項目ごとグループ間の差が大きかった。今回の調査で、項目ごとのグループ間の差は50%以上の開きがあったもの(表1の項目3、4、8、11、18)は歴然として多かった。項目ごとのグループ間の差の開きがあればあるほど事例の学習効果があると考えられる。つまり、学生が資料ありとなしの違いによって、貧困に対する認識がはっきりしていると客観的に評価できたと言える。

しかしながら、今回の被験者人数が少ないうえ、有効回答数がさらに低かった。また、意図的に養成校の学生に限定し、資料有無の効果を検証するとはいえ、一般学生の調査をしなかったことから、単純の比較は妥当性に欠けるとも考える。いずれにせよ、学生においては、すぐそこに迫っている子どもの貧困という社会情勢を深く意識していないように見受けられた。調査対象である保育者を目指す学生について、専門知識に加えて、より社会情勢に目を向け、子どもの貧困を捉える目が必要であると考えられる。

表3 2019年度の「第1問：シングルマザーの貧困の21項目の結果」^{xiv}

n=161

カテゴリ 項目番号	生活の質				世帯の家計状況											保護者の状況				貧困○の数 平均		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	17	18	19	20	21	12	13	14		15	16
項目内容	携帯・スマホ所持	食事の欠食あり	汚れた服	入浴・清潔不十分	電気・ガス・水道代延滞	受診抑制	学用品費・給食費延滞	食料品購入抑制	学習参考書購入抑制	自動車購入抑制	テレビ・冷蔵庫等購入抑制	借家	家賃延滞	生活保護家庭	返済不能のローン有り	年一回の行楽無し	低学歴	非正規	よく子どもを怒鳴る	子どものケアへの時間不足	経済的・精神的余裕無し	
Aグループ 養成校 (資料有り)	11.6%	55.1%	62.3%	59.4%	81.2%	69.6%	81.2%	55.1%	65.2%	37.7%	43.5%	37.7%	63.8%	72.5%	58.0%	36.2%	50.7%	44.9%	40.6%	89.9%	79.7%	12
Aグループ 一般学生 (資料有り)	8.3%	41.7%	66.7%	58.3%	87.5%	62.5%	83.3%	50.0%	70.8%	16.7%	45.8%	20.8%	79.2%	70.8%	54.2%	25.0%	50.0%	37.5%	58.3%	79.2%	87.5%	11.5
Bグループ 一般学生 (資料無し)	8.8%	36.8%	27.9%	20.6%	47.1%	50.0%	55.9%	29.4%	38.2%	35.3%	26.5%	30.9%	29.4%	39.7%	32.4%	30.9%	39.7%	27.9%	16.2%	48.5%	63.2%	7.4

．まとめ

本研究で、養成校の学生としては、期待するほど全般的にシングルマザーの貧困への関心が高くない結果となった。シングルマザーを見聞きした状況も、学生の一部はテレビのニュースであるが、養成校で学ぶ学生とあって多くは授業からであった。そして、貧困の事例を取り入れた講義を丁寧に解説することによって、理解や関心を高める効果があったことを実証した。特に求めてはいなかったが、46名のうち3名(6.5%)がシングルマザー世帯の当事者であることを自ら明かした。実際にはそれ以上に多いという可能性があるかと推測する。長年、筆者は高等教育現場に立ち、大学の中途退学者が増えたのを実感している。学業を中退した理由として「経済的理由」が増え、中退学生の中ではシングルマザー世帯の多さが気になっていた。実はこれこそが近年筆者が貧困問題に取り組むようになったきっかけである。シングルマザー世帯が抱えている経済的な困難を払拭できない。文科省の調査によると2020年10月までにコロナ禍の影響で、大学生・院生は休退学者5千人超ということがわかった^{xv}。そのため、政府が支援策を打ち出し、緊急給付金を支給した。その後、国や大学の支援策が奏功したというが、2021年2月16日に「コロナで大学休退学5800人 昨年4～12月」^{xvi}と発表した。このような予断を許さない厳しい状況下で、勉学中の学生たちに自分自身、そして自分の周りにもある貧困問題を抱えている・悩んでいる仲間がいることに気づいてほしい。学生たちにはお互いに気遣い励ましなが、学業を続けることがいかに貴重なことかを実感し、学習への動機づけに繋がればと思いつつ学生指導に当たっている。すべての子どもは貧困による教育格差から解放され、劣等感やコンプレックスを払拭し、自己肯定感を高め、人生を悔いなく過ごすことを願っている。

教育者として日本の貧困問題、特にシングルマザー世帯の現状を保育者・教員養成校の学生に伝えている。学生が将来保育者になって、貧困に陥っている子どもに出会う際、保護者と子どもの気持ちを理解し、適切な対応ができるようにするのが教育者の重要な務めであると考えている。講義の中で学生に専門知識を伝授するだけでなく、最新の研究結果を学生に提供するようにしてきた。このように教育と研究の2本立てで、学生に理論と現実を理解させ、社会の現状を把握しながら時代のニーズに合う柔軟な態勢で仕事に臨むことができるように心掛けてきた。そこで講義を通して、学生たちにすぐそこにある貧困という厳しい現状と保育者が子どもたちの成長と発達を理解し、子どもたちの置かれている環境の変化を理解することの重要性に気づいてほしいと願っている。さらに、保育者・教員養成校の教員として、学生に子どもたちと保護者の気持ちに寄り添って、支援できるような保育の仕方を習得できるよう、指導することを目指している。そのため、本研究で学生たちにシングルマザー世帯の貧困の意識調査を行い、今後の教学に示唆を得た。

すでに24年も前に中田らによって『日米のシングルマザーたち』^{xvii}(1997)が発表され、シングルマザー世帯の貧困がクローズアップされた。しかし現代の日本では「子ども

の貧困」がさらに進行している。子どもの貧困問題を解決するため、まず一般の人々は貧困の実態を意識し、そこから解決法を探らねばならない。さらに、保育者・教員養成の立場から学生に「子どもの貧困」の現状を伝え、すでに貧困状態に陥っている子どもたちを救う。子どもの貧困を判断するには専門知識が必要になるため、そこで保育者の専門性が問われる。2019年10月に公表されたOECD（経済協力開発機構）の調査結果によると、日本の保育者は社会から評価されていると感じる割合がほかの8カ国より低く、最下位という結果になった。OECDによる調査は保育従事者を対象に初めて行なわれ、日本のほかドイツ、韓国、ノルウェーなど9カ国が参加した。日本は3～5歳の子に関わる保育士ら1,616人、保育園や幼稚園の園長216人が2018年に回答したものであった。その結果、保育士らの仕事が評価されていると感じるかについて、日本は「社会から評価」が3割程度にとどまり、参加国の中で最低と残念な結果になった。「社会からの評価の低さは、今もほかの職種に比べ10万円近く低い賃金など待遇の影響が考えられます」と秋田（2019）が指摘する^{xviii}。また、保育の質の向上には、「保育士たちが働きたいと思えるよう、専門性が評価され、キャリアアップできる仕組みが必要です」と綴られた。保育者の専門性を高めること、人手不足を解消し、子どもたちを手厚く保育できるような環境づくりは保育・教育現場では待ったなしの緊急課題である。

客観的に保育者の社会的評価が低い日本だが、保育に対する理念は低くない。ノーベル賞受賞者であるジェームス・J・ヘックマンは、『幼児教育の経済学』という著書で、「非認知能力が生涯にわたる発達、社会生活全体での幸せに影響する」と指摘して注目された。教育の投資効果に関する研究だが、認知能力（テストの成績、読み書き、計算など）よりも非認知能力（意欲、実行力、協調能力など）が長い人生において多大な影響を及ぼすことを示唆した^{xix}。この点において、日本の保育理念は非認知能力を培うことに優れている点は評価された。日本の保育現場では、リズム・歌・手遊び・絵本の読み聞かせのほか、思いやり・愛他性・協調性など従来の情操・道徳教育のような理念のもと、そこで培われる人間性は評価に値する。これが生涯において、幸福感を感じることにつながると考える。このように人間の生涯に関わる大事なことに携わる保育者たちの仕事は何故日本社会では評価が低いのか不思議に思う。

2018年9月に「『待機児童ゼロ』首相『今度こそ、終止符を打つ』」^{xx}という新聞の見出しがあった。そしてついに2019年10月に「保育料無償化」が始動した。一見、政権の公約を果たしたように見えたが、冒頭に述べたように「保育士不足」・「保育士の待遇改善」・「保育士の高離職率」・「ベテラン保育士の不足」など諸問題が解決しないまま、さらに「保育士の一斉退職による閉園」^{xxi}・「保育料の値上げ逆転現象」・「助成金の詐欺」^{xxii}など問題が噴出した。公約を果たすため「無償化」を優先し、保育者が置き去りにされたという厳しい現実となった。保育者待遇の悪さについても、長年指摘されてきたが、一向に改善できていない。聖職と称し、「ボランティア精神が悪用されている」という指摘（松田・

北川、2014)^{xxiii}、また、新聞で報道された「酷使される保育士」(鳴沢、2014)^{xxiv} などの指摘も相次ぐ。2017年10月時点で、「保育士の賃金加算なども進めるが、それでも16年の平均賃金は額面月22万3千円。全産業平均より11万円ほど低い」^{xxv} と新聞に記載された。このような批評から数年も経ったが、保育者の待遇は一向に改善されていない。

さらに、追い打ちをかけるようにコロナ禍の中で、現場の保育者は対人的な職業柄から「在宅勤務」や「遠隔保育」というのは無理がある。命の危険をさらしながら職務に当たり、保育者は待遇を改善されないまま、そのうえ長時間保育が強いられる厳しい状況にある。保育者不足と叫ばれ、保育者の離職率が高まり、ベテラン保育者の育成は一層難しくなる一方である。保育者の社会的評価が低く、待遇が改善されないままでは夢見て保育者を志す学生が現実の厳しさを知った途端、モチベーションが下がり、養成校の中退者が増える一因にもなり、転職率・離職率が高くなる一因にもなる。保育者不足解消、人材確保するためにも保育者の待遇を改善することが緊急課題である。それ故、これらの問題を解決しない限りは日本の保育・教育の根幹を揺るがしかねない。

保育者・教員養成の立場から学生に「シングルマザー世帯の貧困」・「子どもの貧困」の現状を伝えることで教育的な意義を果たす。筆者は保育者・教員養成校で、教育心理学・発達心理学・保育の心理学・幼児理解の理論と方法・子ども家庭支援の心理学・心身の発達と学習過程など教職関連の授業を担当している。保育者・教員養成関連の授業を受け持っているかたわら、自分の研究活動をいかに教育活動に活かすか工夫し、実践している。専門職教育の一環として、我々は学生に専門知識を伝授し、研究成果を学生にフィードバックし、学生に実習や卒業後の仕事に反映できるようにする。今回のシングルマザーの貧困状況の調査を活かして、学生に専門職としての保育者の仕事がいかに子どもの発達を支え、子どもの命を貧困から守るかを理解させる。少子化の中でこそ、保育の質を向上し、子どもたちの命を守る保育者の専門性をさらに高めるよい機会である。保育者不足の中で、保育者を目指す学生の夢を実現できるよう、これからも保育者の処遇問題に取り組み、処遇改善を訴えつつ、学生たちの保育者になるモチベーションを高め、学習意欲を高めることに努めたいと考えている。

一年以上もの間、通常の保育・教育ができず、現場ではオンライン保育や遠隔授業という試みを行っている。「オンライン保育始めました」(京都)、「保育士岡山さん、毎日ネット配信」(名古屋市)、「動画配信500万超す笑顔」(名古屋市)、「手作り動画で園児ほっと」(名古屋市)、「園児の遊び 動画で発信」(山梨)と日本各地よりオンライン保育が展開されてきた。保育・教育活動は本来なら人と人との触れ合いによるものであり、動画配信では限界がある。長期間による動画配信のオンライン保育では、テレビ教育番組と同じように一方通行のものになり、子どもたちがコミュニケーションを取ることが下手になる恐れがある。何よりも人格形成の段階で人の温もりを肌で感じとることや信頼関係ときずなを結ばれる機会が損なわれることを憂い。日本だけではなく、世界中の国々はいまだにコ

コロナ禍の渦中にいる。一日も早くコロナ禍の終息が迎えられ、平和な日常に戻ることを願ってやまない。

【註】

- i 中塚久美子 (2020) 「19歳ひとり親『ご飯ない』と検索」朝日新聞、2020年10月28日付、14版1面記事
- ii 仲村和代・田淵紫織 (2019) 「過労・薄給・不信 相次ぐ保育士の一斉退職」朝日新聞、2019年5月17日付、14版23面記事
- iii 中井なつみ・浜田知宏 (2020) 「『受け皿』乱立 ビジョンないまま 保育異変下」朝日新聞、2020年10月1日付、13版23面記事
- iv 伊藤舞虹 (2020) 「認可園で虐待 おびえる我が子 保育異変上」朝日新聞、2020年9月30日付、13版23面記事
- v 伊藤舞虹 (2019) 「待機児童の受け皿『量』急いだ果て」(審査ずさんな企業主導型「質」置き去り)朝日新聞、2019年7月10日付、13版25面記事
- vi 宮本太郎 (2019) 「世帯間の格差 広がる」(フォーラム 幼保無償化バラ色?)朝日新聞、2019年9月29日付、13版9面記事
- vii 中田照子・杉本貴代栄・森田明美 (1997) 『日米のシングルマザーたち』ミネルヴァ書房
- viii (1) 陳惠貞・劉郷英・丹羽正子・平岩定法・中田照子・穴戸健夫 2017 現代の子どもの貧困 - 日中比較研究 日本の実態 - 日本保育学会第70回大会発表要旨集、511、発表 ID:K-D-8-290
(2) 劉郷英・陳惠貞・植村広美 2017 現代の子どもの貧困 - 日中比較研究 中国の実態 - 日本保育学会第70回大会発表要旨集、512、発表 ID:K-D-8-291
(3) 陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・穴戸健夫 2018 シングルマザーにおける生活と子育て 現代の子どもの貧困 日本保育学会第71回大会発表要旨集、1196、発表 ID:P-D-13-4
(4) 陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・穴戸健夫 2019 保育専門職の学生におけるシングルマザー世帯の貧困の意識調査 現代の子どもの貧困 日本保育学会第72回大会発表要旨集、1139-1140、発表 ID:P-D-5-4
- ix 陳惠貞 (2018) 「シングルマザーの貧困と子どもの発達に関する一考察 保育者をめざす学生の学習意欲を高めるために」『子ども学研究論集』第10号、名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター、pp.1-12
- x 陳惠貞 (2019) 「シングルマザー世帯の貧困に関する調査研究 保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために」『子ども学研究論集』第11号、名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター、pp.1-15
- xi 陳惠貞 (2020) 「シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査 保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために」『子ども学研究論集』第12号、名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター、pp.1-12
- xii 陳惠貞・杉本美苗・丹羽正子・平岩定法・中田照子・穴戸健夫 (2018) 「シングルマザーにおける生活と子育て 現代の子どもの貧困」日本保育学会第71回大会発表要旨集、1196、発表 ID:P-D-13-4
- xiii 阿部彩 (2017) 「子どもの貧困問題への社会科学的アプローチ」『学術の動向 2017.10』、pp.8-13 jst.go.jp (CiNii 論文の情報取得日 2020年10月20日)
- xiv 陳惠貞 (2020) 「シングルマザー世帯の貧困に関する短大生の意識調査 保育専門職学生の意識と学習意欲を高めるために」『子ども学研究論集』第12号、名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター、p.5
- xv 伊藤和行 (2020) 「コロナ禍で休退学5千人超 大学生・院生、文科省が調査」朝日新聞デジタル、2020年12月18日付 [コロナ禍で休退学5千人超 大学生・院生、文科省が調査:朝日新聞デジタル (asahi.com) 情報取得日 2021年2月17日]
- xvi 増谷文生 (2021) 「コロナ禍で休退学5千人超 大学生・院生、文科省が調査」朝日新聞、2021年2月17日付、14版29面記事

- xvii 前掲書, 中田照子・杉本貴代栄・森田明美 (1997) 『日米のシングルマザーたち』 ミネルヴァ書房
- xviii 秋田喜代美 (2019) 「人手不足・低賃金が背景に OECD 調査日本の保育者、低い『評価実感』」朝日新聞、2019年11月22日付、13版19面記事
- xix ジェームス・J・ヘックマン (2015) 『幼児教育の経済学』 (古草秀子訳) 東洋経済新報社, pp.17-18
- xx 田淵紫織・中井なつみ (2018) 「『待機児童ゼロ』首相『今度こそ、終止符を打つ』」朝日新聞、2018年9月5日付、13版2面記事
- xxi 仲村和代・田淵紫織 (2019) 「過労・薄給・不信 相次ぐ保育士の一斉退職」朝日新聞、2019年5月17日付、14版23面記事
- xxii 伊藤舞虹 (2019) 「待機児童の受け皿『量』急いだ果て」(審査ずさんな企業主導型「質」置き去り)朝日新聞、2019年7月10日付、13版25面記事
- xxiii 松田史朗・北川慧一 (2014) 「年収300万 待遇改善拒む企業」(「酷使される保育士」)朝日新聞、2014年8月25日付、13版4面記事
- xxiv 鳴沢大 (2014) 「社福でもたりぬ人手 行事に忙殺」(「酷使される保育士」)朝日新聞、2014年8月25日付、13版4面記事
- xxv 西村圭史・植松佳香・田淵紫織 (2017) 「子育て支援 課題積み残し」朝日新聞、2017年10月5日付、13版3面記事
- xxvi 藤松奈美 (2020) 「オンライン保育始めました」京都新聞、2020年4月23日付
松野穂波 (2020) 「保育士岡山さん、毎日ネット配信」中日新聞、2020年5月15日付
鈴木凜平 (2020) 「動画配信500万超す笑顔」中日新聞、2020年5月16日付
武藤周吉 (2020) 「手作り動画で園児ほっと」中日新聞、2020年5月18日付
村上裕紀子 (2020) 「園児の遊び 動画で発信」山梨日日新聞、2020年5月29日付